「約束による相続人」　　２０２２年9月１１日
ガラテヤの信徒への手紙３：２１～２９
佐々木　佐余子

３章は主に、ユダヤ人が大事にしている律法について、かつて律法学者であったパウロが同胞のユダヤ人に詳しく教えているところです。わたしたち日本人はユダヤ人の律法理解の多くは知らないのですが、でもこの律法を通して信仰義認論という教え、教理が確立されていくので、律法とは何なのかをもう一度考えてみたいと思います。律法はいわゆるモーセ五書です。前回話しましたが、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記です。その全体は「精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛さなければならない（申命記６：５）」と「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければない（レビ記 19:18)」ですが、ユダヤ人はこの 2 つの律法に尽きると考えていました。しかし、この文字で書かれた律法に文字で書かれない律法を加えたのです。これらは、ミシュナー、トーラーと呼ばれました。これは人々の言い伝えです。新約時代イエスの弟子たちの中に汚れた手で食事したり、市場から帰って来ても手を洗わないで食事したりしている弟子たちを目撃した律法学者が、イエスに問いかけます。「なぜあなたの弟子たちは昔の人の言い伝えを守らないのですか」と聞くと主イエスは答えます。「あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを大事にしている。モーセは父と母を敬えと言っているのに、あなた方は、父や母に何もせず、これはコルバンです、神の捧げものですと言い、父母に何もしない」と律法学者の偽善性を批判しました。そして、外から人の体に入るものは人を汚さず、人から外に出るものが人を汚すと教えられました。（マルコ 7:1~23）このような言い伝えがミシュナーです。トーラーは元来、指図や教示を言うのですが、神が祭司や預言者を通して与えるものを言ったのです。ところがこれらのトーラーが人々の生活の指針として段々正典化していったのです。ですからユダヤ人の生活に深く根ざしているのです。この律法を払拭するにどんなに大変だったでしょう。ユダヤ人は律法にがんじがらめになっていたと言っても言い過ぎではありません。ですからパウロが宗教改革をするのは容易ではなかったと思います。

しかし、パウロは神から使命を与えられていました。パウロは死に至るまで使命に従順であったのです。パウロはユダヤ人が尊敬しているアブラハムを例にして説明しました。ユダヤ人を説得するには良い方法です。ある日、主はアブラハムを外に連れ出して言われました。「天を仰いで星を数えることができるなら、数えてみるがよい、そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」（創 15:5~6）とあります。であるから信仰によって生きる人々こそ、誰でも異邦人でも、アブラハムの子であると教えたのです。そして次に、１１節「律法によってはだれも神のみ前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、『正しい者は信仰によって生きる』からです。」とありますが、パウロは律法の専門家であるので旧約聖書のハバクク書を参照しています。旧約聖書にハバクク書という聞きなれない預言書があるのですが、その２章４節にこのよ

うに書かれています。「見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる」と書かれています。ここを口語訳で見ると「しかし、義人はその信仰によって生きる」とあります。とてもパウロの言葉と似ていますね。パウロはここを引用して述べているのです。信仰義認論は紀元前６００年ぐらい前からハバククによって預言されていたのです。驚きです。

改めて律法とは何でしょうか。たとえでわかりやすく言うと、ある他人の家の庭においしそうな柿の実がなっていて、見るからに丁度食べごろでした。昔、教父のアウグスティヌスが子供の頃それを見て、長い棒を振りかざして取ろうとしました。柿はポトンと地面に落ちたのです。取って食べたかどうかは定かではありませんが、普通は取って食べるのです。さて、モーセの十戒には、「あなたは盗んではならない」とあります。この戒めがなければアウグスティヌスは罪に問われなかったはずです。けれど、明らかに彼は罪を犯しました。１９節を見ると、「では、律法とはいったい何か。律法は、約束を与えられたあの子孫が来られるときまで、違反を明らかにするために付け加えられたもので、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものです」とパウロは言います。約束を与えられたあの子孫とはイエス・キリストを指すのです。人間は生まれながらの罪人であり、とパウロは言いますが、私は最初この言葉を聞いて嫌な気がしました。どうしてあの汚れのない赤ん坊が罪人なのでしょう。笑っている顔はあどけない天使そのものではないでしょうか。それがなぜ生まれながらの罪人というのか悲しかったです。でも後からわかりました。人間には確かに原罪があるのです。もうすでに遺伝子に組み込まれて生まれてくるのです。これは悲しいけど本当のことです。

私は前幼稚園で働いていて、園児の生態をよく見ました。朝９時から１０時まで一緒に遊ぶのです。子供は無邪気に遊んでいるけれど、悪いのがいて次々と子供にちょっかいを出してぶったり叩いたりして逃げます。叩くとは何回も何回も打つことを叩くというのです。年長の大きな子供が、何もしないでおとなしく遊んでいる小さな年少児の子供を叩くので子供は泣きだします。それを見て、もう子供のころから原罪があると思いました。それで泣いている子供の所に連れて行って、謝りなさい、というとすぐ「ごめんね」というのです。泣いている子供も「いいよ」とすぐ言うのです。そういうところが子供は素晴らしいですね。わだかまりがないのです。大人はどうでしょうか。人間は生まれながらの罪人ですが、律法によって自分のしていることがいいことか、悪いことかわかります。律法によって自分たちの罪がはっきりわかります。ですから、律法は、その罪から救ってくださるイエス・キリストが来られるまでの間、与えられたものにしかすぎないのです。

そこで今朝の２１節に行きます。「それでは、律法は神の約束に反するものなのでしょうか。決してそうではない。万一、人を生かすことができる律法が与えられたとするなら、確かに人は、律法によって義とされたでしょう」と言います。パウロはそうではないと言います。神が律法を与えたのは、人間が律法を行うことによって義人とされ、永遠の命を受けて神の国に入るためではないのです。人間は律法を行おうとすればするほど、罪が増しそこか

ら抜け出せないのです。例えば「あなたの父母を敬いなさい」と戒められても、そのように出来る人はいいけれども、なかなかそうはいかないかもしれません。「殺してはならない」は守れるでしょうけれど、「盗んではならない」はどうでしょう。キリスト者であっても罪を犯す人はいるかもしれません。２４節を読むとこうあります。「こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです」と言います。養育係とは鞭でご主人様の子供たちを学校に連れて行ったり、行儀の悪い子供たちに礼儀作法を教えたりする奴隷なのでした。そのように律法は養育係のように人間を罰したり、監督して、恵み深いイエス・キリストに人間を導く働きをしたのです。けれど、イエス・キリストが来られたら、人はもはや養育係は必要とはせず、つまり、律法は必要ではない、とパウロは言うのです。イエスさまの教えられた２つの戒めを守って生活すればよくなったのです。これはとても深い恩恵です。２６節はありがたいお言葉です。「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。」 ２７節「洗礼（バプテスマ）を受けて、キリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」と言います。これは信仰のことを言っているのです。キリストを着たからと言って皆キリストのように行動できるわけではありません。時には罪を犯すこともあるでしょう。イエスさまを信じていることを言っているのです。２８節「そこではもはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」とあります。バプテスマによってキリストと一つにされた者の集まりが教会なのです。パウロの時代、一つ屋根の下に集まって共に礼拝していました。そこにはユダヤ人やギリシャ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もなかったのでした。イエスをキリストと信じる者たちが集まって礼拝していたのです。コリント書には当時の状況がこのように書かれています。「なぜなら、食事のとき、各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです」と書かれているのです。初代教会の頃は、イエスさまは捕縛される前、過ぎ越しの主の晩餐をされたので、そのことを覚えつつ、信者たちもイエスさまが復活された主の日に、ある家に集まって礼拝をしました。そこには富める者も、富める者は貴族かもしれません、貧しい人も奴隷もいたでしょう、男も女も子供も赤ん坊もいたでしょう。家のお手伝いさんも家の用事をする人もいたし、ユダヤ人クリスチャンもギリシャ人クリスチャンもおり、一緒に食事をして礼拝し、み言葉を聞き賛美し祈りをしたのです。ところが、富める者は自分たちで勝手に食べてしまい、あるいは葡萄酒を飲んで酔っ払い、後から来た貧しい人たちは粗末な食事をし、でも多分富める人たちから分け与えられたと思います。そういう礼拝をしていたのです。ローマの一般社会から見たら奴隷と貴族が一緒に食事をすることはなかったと思う。ですから教会は本当に神の国の先駆けとなっていたのです。そう見ると教会は、天国の模倣の、写しの共同体と言えます。（コリント一１１：１７～２２） ２９節「あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です」とパウロは言います。信仰的に見たら、ここに連なるわたしたちも、アブラハムの子孫であり、約束の相続人と言え

るのではないでしょうか。本当に感謝なことです。

今回はイエスさまの第２の戒め、「あなたの隣人を愛しなさい」について、少し思いを巡らしたいと思います。人を愛するとはどういうことなのか。愛とは何かを考えたいと思います。イエスさまのみ教えに黄金律と言う戒めがあります。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」（マタイ 7:12 Golden Rule）まさに黄金律ですね。皆さん方はこの戒めをどうお考えですか？ 日常の生活で実践するのは困難なことです。でも実践した人はイエス・キリストです。主イエス・キリストは十字架上で黄金律を身をもって実践しました。このことはイエス・キリストは本当に神のお子であったという証明です。そのような方を私たちは救い主として信じるようにしていただきました。何の功績もない者を世から選び出し、救ってくださったのです。今日から始まる一週間、今を感謝して歩みたいと思います。